



ジョナサン・ベネディクトの5分で学ぶ父親業 ● その2

子どもは親の信頼に応える

聖書に「愛はすべてを信じる」(第一コリント13章7節)とありますが、子どもは親が自分を信じてくれる愛を必要としています。信頼関係は、ちょうど私たちと神との間に信頼が欠かせないよう、親子関係の基礎になります。

信頼とは？

ところで、「子どもを信頼する」とはどういうことでしょうか？それは、説明責任がないとか、何のルールもないということではありません。何が正しいことかをはっきりと伝え、模範を見せるのは親としての責任です。また、信頼は努力して勝ち得るものであって、一度裏切られると簡単には取り戻せないものです。子どもがしたいことでも、親がダメと言わねばならないこともあります。子どもが誘惑に抵抗できない、または誘惑に勝てるほどに強くないと思えるからです。そういう時、子どもは「ぼくを信用してないの？」などと言いますが、「大人だって、互いにチェックし合う必要があるんだよ」と答えてあげる必要があります。

わが家と私自身の思春期のこと

私の家では、何を読んだり見たりしていいか、何が神さまに喜ば

れるかは十分に言い聞かせていて、子どもたちには耳タコです。子どもたちが小さい頃から、私は彼らが見るテレビ番組、ビデオや映画、読む本などかなりの注意を払ってきました。ことに、性的なことがらについてです。

「お父さんは、愛とか恋とかをにおわすものが何か出てこないかと、いつも見張っています」と子どもたちは感じていました。彼らが十代に入ると、私の心配はさらに高じたのです。「親が見てほしくない画面になった時は、子どもは自分でテレビを消したりチャンネルを変えるさ」というふうな考えのほどには、子どもたちを信頼していませんでしたし、彼らもそれに気づいていました。

どういうわけか、私は子どもたちを信頼しかねていたので、私にこれがほどとらわれていたのはどうしてでしょう？

ある祈りの集会の帰りに電車内で突然、神さまが私の目を開いてくださいました。それは、私自身の子どもの時代のことです。

10歳の時、本屋さんで見た漫画から、性について興味を抱き始めました。十代には「エロ本」と呼ばれるものを目にし、成人映画をこっそり見に行くことをしました。自分がそういうことを隠れて

していて、そんなことは何年も前に神さまに告白し、赦されていることを知ってはいたので、子どもたちが自分のかつての年齢に達した時、彼らも自分と同じように人目を忍んで同じことをするものと思ひ込んでいたのです。

私の不信感自分の過去の体験に根ざしていて、子どもたちも同じことをしないようにと念押しをしていたのだ、と気づいたので。だから彼らは私のことを息苦しく感じたし、私は、子ども自身に判断を下させなかつたというわけです。

子どもは親の信頼に応える

それ以来私は、自分の過去の失敗から過剰反応をするのではなく、もっと理にかなった対応ができるよう神の助けによって努力できるようになりました。

金銭であれ、友人関係であれ、カンニングであれ、私のような娯楽問題であれ、自分が若気のいたりで失敗した領域において、子どもを信用しないという失敗を親は犯しやすいと思います。自分が大きな過ちをしていると、「子どもも全く同じだ」と思い込みます。そういうケースも確かにあるとは思いますが、最初から猜疑心をもって近づくのではなく、理解の心



をもって子どもたちには接したいものです。

神さまは、私たちが不完全であっても、疑って接することはありません。同じように、私たちも愛をもって子どもを見守ってあげることが大切です。

先日、テレビを見ていた時のことです、私が部屋を離れ、戻ってきた時にはスイッチが切られていました。どうしたのと聞くと、一人の子が、「歌手が出てきてエロチックなダンスを始め、怪しげな雰囲気になったから消した」というのです。

子どもたちが自分で判断を下せたことに、私は父親として大変満足でした。



文＝ジョナサン・ベネディクト
1956年山口県岩国市生まれ。宣教師2世。
4男6女がいる。長野県在住。
清泉女学院大学講師。
著書「ふたりのために」